

されて、胸をなでおろしたわけなんです。岸壁に私たちを乗せていく信洋丸が横づけされている。私たちは整列させられて、名前を呼び出されて、団結の歌を、「腕を組んで行こうぜ、おお、みんなで腕組んで」と言って、大きな声で団結の歌を歌いながら船を見上げて、ナホトカの港はちょうど満潮になっておったので、陸すれすれに喫水線が上がっていた。大きな信洋丸を上向きにながめながら、日の丸の旗が船に上がっているのを懐かしく。要領よくやっていないと、またシベリアの方に送り返されたら大ごとだからということで、タラップをしっかりと踏みしめながら、手すりをしっかりと握って上がっていったのです。

そのとき、船の上で、船員さんたちが「ご苦労さんでした」ということで、船員さんたちに迎えられて船に乗って、各自、信洋丸は運搬船ですから、二千人ぐらい収容されていたわけなんですけれども、貨物を乗せるところに、ずうっと横の方に、真ん中はずうっと吹き抜けになっていて、横の方はずうっと棚になっていて、その棚にずうっと五段か幾らかあったと思うんですけれど

も、兵隊が乗ってしまったわけです。二千人ぐらい乗ったらいいんですけれども、そこでいろいろ弁当の配給があつて、さあ、出発だと船は出港して、船が出ていくときはもう私たちは船底に入っているのです、ナホトカは見る事ができず、さよならしたわけです。懐かしいといえ懐かしい。ソ連の郷土を離れてさよならしたわけですからけれども、一昼夜だったと思います。船の中で一晩泊まったことを覚えていきます。やがて舞鶴に着いたときに、舞鶴のあの緑に満ちたる日本の郷土が、本当に日本の郷土に帰ってきたんだということで、胸が弾んで、みんな抱き合つて喜んだわけです。

やがて上陸が始まって、日本の民間の人たちが迎えてくれた。

## チグロワヤ伐採隊体験記

熊本県 酒井国良

多良木町の酒井国良でございます。戦車におびえると

いう意味をこれから話してみます。

昭和二十年一月十五日、博多に集合し、渡満。定寧七〇〇部隊に入隊しました。初年兵は移動、移動に追い回されながら、一期の検閲もようやく終え、八月八日の夜のこと、班長殿が命令受領より内務班に帰り、にこにこしながら、あしたはお前たちと牡丹江外出ということ、ただし班長引率に限るといふ達しがありました。満州に来て初めての外出とあって、床にもろくにつかず夜半まで眠れなかつた。突然、けたたましいラッパの響きに目が覚めました。非常呼集である。外出の夢も一変して出動命令。七〇〇部隊は四中隊に直ちに弾薬輸送に出発。線路、貨物廠に野積みになっている大小の弾薬を二キロほどの山の地下濠の中に、夜を徹して二昼夜連続で輸送しました。午後、樺林兵舎へ向けて帰途の途中、雨にたたられ、何十台の車両の後で、我々四中隊六分隊は最後尾でひざまでぬかるみにはまり、事故が続出。鹿児島出身の吉田君が車の下積みになり、腹部内出血で途中で死亡するという悲惨な事故も起こりました。樺林兵舎に着いたのは夜半を過ぎていました。その疲れで死

んだようにぐっすり眠っていた。

十二日、牡丹江集結の命を受けて出発。六分隊が道路に出た瞬間、前夜出発して空き兵舎になっているうち、二中隊跡に物すごい銃剣が二、三発打ち込まれた。間もなく大型の戦車が姿をのぞかせて、我々を目標に進んできた。百メートルぐらい進んだかと思つた途端、急に前の車両が車ごと物すごい音とともに土手に打ちつけられた。そのとき敵の戦車であることを察することができ、いよいよ恐ろしい追撃戦が始まったのである。我々の部隊には、軽機関銃があるぐらいで逃れるほかないので、牡丹江に向けて急いだ。樺林パルプ工場に来た途端、ポイントに何台もの車両がひっかかり、通ることもできずうろたえていると、班長殿が引き返してきて、「酒井、早く車両をはずして、馬で逃げろ」と大声で叫んで飛んでいった。車をはずしながら、後方を見たら、戦車の上のふたをあけて、こちらをのぞきながら物すごい音を響かせて進んでくる。馬にまたがるや、道路下に引きおろして、線路沿いに逃げた。道路は荷物をはずした車両が満ちあふれて進むことができなかった。車両も折り重なる

ように放置され、車両に進路をはばまれて、その間、我々は掖河にたどり着いた。掖河では野砲隊が撃ち込んでいた。やっと救われた。もし戦車銃撃でもしていたら、ひとたまりもなく皆殺しだったろうと恐怖の夢を今でも時々見ることがあり、驚いて目を覚ますこともありませす。

いよいよ武装解除後、拉古の糧馬廠をあとに、約六大隊一緒に収容されて、そこで二十日ぐらい滞在していたわけです。その間は、ほんのソ連の給与で、あまり米という米も食わせられずに、もう栄養失調が大分続発して、水を飲めば下痢をして、チフスを起こすという方もたくさん出てきて、その後二十日過ぎて、九月二十八日にチグロワヤに着いたわけです。その間、途中で大分監視がいて、体じゅうを検査して、主に時計とかバンドとかそういうのをかっぱらわれてしまつて、ソ連に着いたときには防寒被服なんかも脱がせられて、ほとんど裸の状態でソ連に入ったわけです。そして、雨外被なんかも雨が降るときにはかぶっていく。二人で行きよれば、それを後ろから来て取り上げていくし、もうどうしようも

ない。警戒兵が銃を持って後ろからついて来るから、もうどうしようもないままにソ連に入っていったわけです。

そして、チグロワヤに着いたのが九月二十八日、その間二か月ぐらいは越冬準備で土を掘り上げて、三メートルぐらい掘つて、それに仮にしのぎの小屋をつくつたわけです。その小屋というのが、丸太を切つてきて、丸太でつくり上げ、十何メートルぐらいのを四つ掘つてつくつたわけです。寝床が二段になって、中が通路になって、ほんの長くなって、足のとどかないぐらい、やっと少し向こうの壁に足がとどくような越冬のための小屋をつくつたわけです。そしてそこで二か月ぐらい過ごしたわけです。

いよいよその後、ノルマがあり、私たちはソ連と参戦して、第五軍の山田大将の軍轄で、赤軍労働大隊十三大隊に転属されたわけです。そして、うちなんかの部隊は全部伐採隊という東隊で入つたわけです。伐採が主で、入つた当時はのことか、なたとかないものですから、一分隊で四組ばかりに分かれて、伐採をそのままにやつて

いたんですが、明けて二十一年八月ごろより、いよいよノルマが大きくなって、十立米を一組で切らにゃいかんということで、もうだいぶソ連の警戒兵なんかがやかましく言うて、切らせるようになりました。その間、十立米というのは、なかなか毎日々々の十立米はできぬのが本場で、たまにはほかの班なんかに加勢したりなんかかして、ノルマをどうにか通していったわけです。伐採に当たっては、松の木なんかも、寒いときなんかは倒れる木が凍っているものだから、折れるようなことがよくあって、途中で折れて、高く舞い上がって落ちてくるということがあって、隣の熊本出身のタカミツさんなんかはその木の下になって亡くなってしまいました。そういう方がやっぱり時々出てきて、ソ連としてはそれも当たり前前のようになって仕事をしていたわけです。たまには、ソ連の警戒兵が十立米をぜひ切らなければいかんということで、つきつきりで、遅くまで切っても切れない場合は帰さんということで、もう知恵比べ、根気比べというところで、夜通し火をたいて、切れんからというていたこともあるんです。そういうことが重なって、

やっぱりだいぶソ連の警戒兵に抗議していたですけども、なかなかこっちの言うことを聞いてくれんことが多かったのです。

十一月ごろともなれば、なかなか山の方も雪が深くても歩くにも難儀することがしばしばあり、山から自動車道路までだいぶおろせないところなんかが出てきて、そういうところなんかはおろすのが雪のためすべって、思わぬところに転げこけ、そういう木の下敷きになって亡くなった方もたびたび出ているような状態でした。ところが、うちの部隊は伐採が主でしたけれども、十一大隊が貨車の積み込みが主体で、たまには大みそかの晩なんかは、十一大隊では積み込みを拒否するのに、うちの部隊に夜中ごろ命令があって、もう休んでいるのに起こされて貨車積み込みなんかに行ったことも、二十一年と二十二年、二回にわたってあります。ソ連というところは、鉄道は二メートルばかり上のところを走っているし、土場は二メートルぐらい下ですから、それに担ぎ上げて有がい貨車に積むんですが、五トン積むのに二時間ぐらいかかって、ようよう積み終えて帰ったら、帰るときには

すでに朝日が上るようなこともあったです。そんな苦勞もあったです。

ソ連の糧秣というのは、最初はパンの二百グラムと砂糖の十グラム、たばこの五グラムです。そういうのをもらいよったですけれども、途中でパンは囚人から盗まれる関係でなかなか糧秣を受領にいても思うように持ち帰ることができなかつたので、パン粉をもらうようにうちの部隊はなつて、ちようど駅から四キロ半ぐらいあつたですから、その間、途中で囚人なんか盗みにくるわけです。パンなんか自動車で持つてくるのに途中でとられよつたものですからそういうことになつて、パン粉に対して、今度はコウリヤンをもらつて、コウリヤンの精米というか、まだよう白米になつておらんやつを持つてきて、雑炊にして食べよつたわけです。水が主で、それこそ中身の無い、はしもかからんような雑炊を朝は食べて、昼はパン粉でつくつた二百グラムの方頭と、帰つて雑炊という仕組みで、ずうつと一日を暮らしていたわけです。その間、春ともなれば雪解けになつて、ようやくヨモギなんかが出てくる季節になると、ヨモギを

み、ソ連のモミの木の下に今のシメジのようなやつが立つのをとつて満腹感を満たしていたわけです。あまり食べ過ぎて、腹をこわしてまた下痢をするような方もたくさんいまして、そのためチフスなんかも蔓延して相当の人が入院し、その後、入院した人なんか本隊には帰らずに、満州の病院へ行くこと出たものの、内地には帰つていない、途中で亡くなつた方が多いのではないかと思ひます。糧秣というのは、本當にソ連そのものが糧秣がなかつたために、ソ連の方もたまには日本の方頭ばくれとだまして、検収を大げさに日本人がだましよつた關係で、年間の検収が不足して、まきを日本人はよそに売つたというようなことを本部からいうてくることも二、三度あつたわけです。

そういう伐採をしながら、三年は過ぎて、二十三年九月二十七日、チグロワヤを出発して、もうそのころは、粉雪が有がい貨車の上に舞うような時期になつておりました。九月二十七日ナホトカ港に着き、そして、四日ぐらいだつたと思う、そこで検査を受けて、二十九日にナホトカ港を出港、十月二日に舞鶴に上陸、復員いたした

わけでございます。

## グリコン戦友愛

熊本県 坂井幸弘

私は陸軍航空士官学校の予科に十八年三月に入って、十九年三月に本科に入って、今の埼玉県入間市に学校があったものですから、航空自衛隊関係の情報センターだったと思うんですが、そこが学校で東京の空襲とかでこっちないものですから、教育のために満州に渡った。当時、満州には四百ぐらい飛行場があって、ほとんどが空きの状態でしたから。四月十五日に渡満して、当時、日本海側に出て、日本海はアメリカの潜水艦がいるというので高岡あたりで二、三日民宿して、物すごく天候の荒れた日に船に乗って、四月二十八日に東満のキョウギ飛行場に着きました。そこで教育を受けました。ソ連が参戦した八月九日は、グラマンが飛行場の上にもしよっちゅう飛んできて、私たちをからかいなが

ら、ウラジオの方に帰っていったんですが、学校からは、おまえたちはとにかく戦争を続けんと。四平に集結ということで汽車でチャムスの方をぐるっと回りながら、あっちこっち鉄砲の音、大砲の音がするという中で、ちようどチャムスあたり、中国から親を捜しに来ていませぬ。ああいう人たちの姿をよく見ながら、ちようど軍用列車だったもので乗せることもできずに。ハルビンで汽車がとまってしもうたですものね。ハルビンの郊外のサンカに飛行場があったから、そこで終戦を教えられたです。それから、また汽車が敦化の方に移動して、敦化の方で天幕生活とか、学校に泊まった。まだ当時はソ連軍も入ってなかったから、軍刀を持っておっただすけん。銃を取り上げられたあとそういう状態で、あっちこっち転々とテント生活とか、泊まって歩いて、東北でしばらく生活しました。そして、敦化にいるとき、いろんな兵隊が千人単位ぐらいで、ここからこままでがどうだというのをソ連が決めたとき、二百四十五大隊に編入されたということです。

そして、二十年十月十日ごろ、日本に帰るから汽車に